

研究主題	子どもの「やってみたい」があふれ 未来につながる幼児教育
研究の重点	幼児教育における今日的課題に応じた保育実践の充実 ～長時間保育における幼児期にふさわしい生活～
研究の視点	一人一人が1日を通して充実した園生活を送るために

～子どもの思い、遊びをつなぐ～

認定こども園に通園する子どもの1日の過ごし方や生活の仕方が近年多様化してきています(長時間保育、短時間保育、預かり保育の利用など)。多くの子どもが時間を共有して過ごしている「教育時間(9時～13時半)」以外の時間にも、子どもの思いや遊びが続いていくよう支えるために、どのような援助や環境が必要かを、事例をもとに考えていきたいと思います。

実践事例 5歳児 らいおん組 『やってみたい』があふれるチャレンジ活動 ～長時間保育の中での取組と継続方法～

保育者の思い: 異年齢の友達の姿が刺激となって、いろいろな遊びに取り組んでほしい。

一学期

- ・「いろいろな運動遊びに興味をもって取り組み、体を動かすことを楽しむ」ことをねらって、鉄棒や縄跳び、マット運動に取り組んだ。
- ・運動会の取組を経て、「できるようになる楽しさ」を感じ、さらに運動遊びが盛り上がってきた。

チャレンジタイム



挑戦: 参加自由

参加の強制はしなかったが、「やってみたい人」「見本を見せてくれる人」と募るとほとんどの児が挑戦していた。

見守り隊: 全員

クラスみんなに見てもらうことで、自信につながったり、友達の成長や頑張りに気付くきっかけとなったりした。



保育者の配慮、工夫

○個人のピンチメーカー (チャレンジカード)

→目に見える形で「できた」という自信や「もっとやってみたい」という意欲につながってほしい。

○チャレンジタイムの開催

→みんなの前で褒められたり、認められたりする経験が自信につながってほしい。

○「がんばり」の共有

→友達が取り組む姿を見たり、面白さを感じたりして、苦手な子も運動遊びに取り組むきっかけとなしてほしい。
いろいろな保育者に褒められたり、励まされたりする中で、自信や意欲につながってほしい。

運動会後

異年齢でチャレンジタイム

運動会後も運動会での活動が自信につながり、日中の活動以外の自由遊びの時間にも縄跳びや鉄棒に意欲的に取り組んでいる。



子どもたちから「地球回りって知ってる？」など技の名前が聞かれ始めている。



朝や夕方の活動で、他クラスの児も興味をもって取り組み始めている。

2学期に向けて 担当の思い

日中の自由遊びのときなども、子どもたちが「やりたい」と思ったときに取り組めるようにしてあげたい。



運動会が終わっても、運動遊びを継続し、盛り上げたい。

一学期末

新しい「種目」や
「技」の提示

「鉄棒や縄跳びをやりたい！」という声に応えられるよう、室内に設定できるような環境設定や活動内容を工夫した。

クラスを超えて友達の姿により目を向けられるように、異年齢の活動を積極的に取り入れたり、朝や夕方にホールなどで異年齢で過ごす時間を増やしたりした。



保育士も参加して
一緒に取り組む

夏休み

クラス活動前にホールでチャレンジ発表
(コマや長縄が現在盛り上がっている)



チャレンジ表

- ・3～5歳児の中で盛り上がっていた「長縄」と「コマ回し」をピックアップ！
- ・3～5歳児が一緒に取り組めるような共通のチャレンジ表を設置。
- ・朝夕の自由遊びの時間に取り組む姿が増えてきた。



保育者の配慮、工夫

- 主な活動場所、発表場所となるホールにチャレンジ表を設置
- 顔写真を移動させて、達成度合いが分かるように
→常に目に見えて、自分や友達の進捗状況が分かることで、意欲や自信につながってほしい。
- 全年齢共通(共有)のチャレンジ表
- 年少児でも分かりやすく、取り組みやすいチャレンジ項目
→5歳児の姿を見て「やってみたい」と思った3、4歳児も簡単に組み立てて、意欲や自信につながってほしい。
- 保育者も一緒に取り組む
→保育者が楽しんで取り組んだり、発表したりする姿を見て、「楽しそう」「やってみたい」「先生よりもできるようになりたい」という意欲につながってほしい。

まとめ

- 1学期の後半に異年齢の活動を積極的に取り入れたことで、自然と異年齢児と関わる姿が増えた。年下の児が年上の児の遊びに興味をもって、やってみようとしたり、年上の児がやり方を教えてあげたり、見本を見せてあげたりする姿が見られた。
- チャレンジ活動ではチャレンジ表を他クラスと共有できるようにしたことで、互いの姿が刺激となって興味をもったり、意欲的に取り組んだりするきっかけとなっているように感じる。



職員の話し合いより

コマや縄跳びを「やってみたい」と思ったり、楽しさを感じたりしたのはどこだったか？

- 子どもたちが「やりたい」と思ったタイミングでできる環境を設定していた
 - ・ 鉄棒を部屋に設定
 - 食後など、室内の自由遊びの時間でも取り組めた
 - ・ いつでも誰かが取り組んでいて、その姿をどの児も見れる状態
 - 「やってみようかな」という興味をもつきっかけになった
 - ・ 苦手な子にはすきま時間が有効
 - 周りの注目度の低い時間では保育者と挑戦しやすく、苦手な子も取組の機会をもつことができた
- チャレンジ表で、クラスの友達や異年齢の友達の進捗状況を知ることができた
 - ・ 互いに認め合うことで自信につながった
 - ・ 友達の挑戦を見て「自分もやってみよう」という意欲につながった
 - ・ 技を達成した友達にコツを聞く姿も見られた
- チャレンジタイムに保育者も挑戦した
 - ・ 「保育者の記録に挑戦したい」「保育者の記録を超えたい」と意欲につながっていた



夏休み中の保育園児のみの経験を幼稚園児にも広げていくためには、どのような配慮ができるか？

- チャレンジ表は幼稚園児分も用意
 - 夏休み明けからすぐに幼稚園児も取り組むことができる
- チャレンジ表をパーテーションに貼り、移動式に
 - 各クラスの部屋でも取り組めるようになったことで、継続できている
- 幼稚園児の夏休み中の経験も保育園児に広げていけるのではないかと
 - 幼稚園児の経験をクラスの中で話題にしたり、経験した遊びを教えてもらったりできるとよい